

耶穌降生千八百八十六年 米國聖書

舊約 聖書

亞麻士 阿巴底亞 米迦翁 哈拿巴

書

明治十九年

日本橫濱印行

02-KI

海老澤文庫

亞摩士書

テコアの牧者の中あるアモスの言、是ハユダの王ウシヤ

の世、イスラエルの王ヨアシの子ヤラベアムの世地震の二年前に

彼が見させたる者、あてイスラエルの事を論るあり其言、云く、

エホバシオンより呼號りエルサレムより聲を出したまふ、牧者の

牧場は哀き、カルメルの巔ハ枯る、エホバかく言たまふ、

三の罪あり、四の罪あり、我があらず之を罰して赦さじ、

我が鐵の打禾車をもてギレアデを打ち、我ハザエルの家に火を

遣り、ベチハダデの宮殿を焚ん、我ダマスコの關を碎き、

谷の中よりろの居民を絶つ、ベテエデンの中より王の杖を執

る者を絶つ、予かん、スリアの民ハ擄へられて、キルにゆかん、

エホバかく言たまふ、我が三の罪あり、四の罪あり、

これを言ふ、オ、エホバかく言たまふ、我が三の罪あり、四の罪あり、

亞摩士書

第一章

自一至六節



曳ゆきてて色をエドムお付せり七我ガザの石垣の内火を遣り
 一切の殿を焚んハ我アシドレ中より居民を絶のろきアシ
 クロンの中より王の杖を執る者を絶除かん我また手を反えて
 ふ○九エホバかく言たまふ、ツロの三の罪あり四の罪あれバ我
 りあらず之を罰して赦さじ即ち彼らと俘囚をことくエドムに
 付しまた兄弟の契約を忘れたり十我ツロの石垣の内に火を遣り
 一切の殿を焚ん○十二エホバかく言たまふ、エドムの三の罪あり四
 の罪あれバ我あらず之を罰して赦さじ即ち彼ら劍をもてるの
 兄弟を追ひ全く憐憫の情を断ち恒に怒りて人を害し永くろの償
 恨をたくりへたり十三我テマンお火を遣りポツラの一切は殿を焚
 ん○十三エホバかく言たまふ、アンモンは人々三の罪あり四の罪
 あれば我あらず之を罰して赦さじ即ち彼らろの國境を廣め

んとてギレアデの孕める婦を割たり十四我ラバの石垣の内火を
 放ちろの一切の殿を焚ん是は戰鬥の日に呐喊の聲をもて爲れ暴
 風の日に旋風をもて爲れん十五彼らの王ろの牧伯等と諸共お擄
 へられて往んエホバこれを言ふ、

第二章

我あらず之を罰して赦さじ即ち彼らエドムの王の骨を焼て灰
 とおせりニ我モアプに火を遣りケリオテの一切の殿を焚ん、モア
 プの躁擾と呐喊の聲と喇叭の音の中に死んニ我ろの中より審判
 長を絶除さるの諸の牧伯を之とよみに殺さんエホバあれを言ふ
 ○四エホバかく言たまふ、ユダと三の罪あり四の罪あれを我かな
 らず之を罰して赦さじ即ち彼らはエホバの律法を輕んじろの法
 度を守らずろの先祖等が従がひし偽の物お惑いさる五我ユダお
 火を遣りエルサレムの諸の殿を焚ん○六エホバかく言たまふ、

スラエルの三の罪あり四の罪あれバ我かあらず之を罰して赦さ
 し即ち彼らの義者を金のために賣り貧者を鞋一足のため賣る
 七 彼らの弱き者の頭あ地の塵のあらんとを喘ぎて求め柔かき者
 の道を曲げまた父子ともに一人の女子に行て我聖名を汚すハ彼
 らの質に取る衣服を一切の壇の傍あ敷てるの上に偃し罰金をも
 て得たる酒をろの神の家あ飲むハ爾あ我ハアモリ人を彼らの前
 に絶たりアモリ人入るの高さあど檜樹のごとくろの強さあど椽
 の樹のごとくありまが我ろの上の果と下の根とをほろぼしたり
 + 我ハ汝らをエシプトの地より携さへのぼり四十年のあひだ荒
 野あれいて汝らを導びき終あアモリ人の地を汝らあ獲させたり
 我ハ汝らの子等の中より預言者を興し汝らの少者の中よりナ
 ザレ人を興したりイストラエルの子孫よ然るにあらずやエホバ
 れを言ふ十二 然るに汝らハナザレ人に酒を飲せ預言者あ命じて預

言するなかれと言ハ十三 視よ我麥束を積滿せる車の物を壓するガ
 ごとく汝らを壓せん十四 爾の時ハ疾走者も逃るに暇あらず強き者
 もろの力を施てすを得ず勇士も己の生命を救ふあど能ハらず十五 弓
 を執る者も立ちあどを得ず足駛の者も自ら救ふあたハ馬に騎る
 者も己の生命を救ふあど能とす十六 勇士の中の心剛き者もろの日
 にハ裸にて逃んエホバこれと言ふ


 一 イストラエルの子孫よエホバが汝らにむかひて言ところ

我ガエシプトの地より導き上りし全家にむあひて言ところ此
 言を聴けニ地ハ諸の族の中あて我たが汝ら而已を知りあの故に
 我あんぢらの諸の罪のためあ汝らを罰せん 三 二人もし相會せず
 ハ争で共に歩かんや四 獅子もし獲物あらずバ豈林の中に吼んや
 猛獅子もし物を攫まらず豈の穴より聲を出さんや五 獅子もし
 設あくを鳥あに地に張る網ああらんや網もし何の得るところ

も無を豈地よりあがらんや六邑にて喇叭を吹を民おどろかさ
 んや邑お災禍のおこるの埃ホバのこれを降したまふあらずや七
 夫主エホバの隠たる事をの僕ある預言者お傳へずしての
 何事をも爲たまひざるありハ獅子吼ゆ誰か懼れざらんや主エホ
 バ言語たまふ誰か預言せざらんやハアシドドの一切の殿お傳へ
 エシプトの地の一切の殿に宣て言へ汝等サマリヤの山々お集り
 ろの中おある大ある紛亂を觀ろの中間におこるる虐遇を觀
 よナエホバいひたまふ彼らの正義をおこるふことを知す虐たげ
 取し物と奪ひたる物とをろの宮殿に積蓄はふ是故お主エホバ
 かく言たまふ敵ありて此國を攻かてみ汝の權力を汝より取下さ
 ん汝の一切の殿の掠めらるべしナエホバかく言たまふ牧羊者の
 獅子の口より羊は兩足あるひの片耳を取かへし得るれみサマリ
 アに於て床の隅またのダマスコ錦の榻に坐するイスラエルの子

孫もろの救ゆるふと是のごとくならん十三萬軍の神主エホバの
 く言たまふ汝ら聽てヤコブの家に證せよ十四我イスラエルの諸の
 罪を罰する日にハテル壇を罰せん其壇の角の折て地に落べ
 しまた我また冬の家および夏の家をうたん象牙の家はるび大さる
 る家失んエホバこそを言ふ

第四章

一

パシヤンの牝牛等

よ汝ら此言を聽け汝らはサマリヤの

山お居り弱者を虐げ貧者を壓し又ろの主にむるひて此お持きた
 りて我らに飲せよと言ふニ主エホバ己の聖を指し誓ひて云ふ視
 よ日汝らの上に臨むろの日お人汝らを釣にかけ汝等の遺餘者
 を釣魚釣おかけて曳いださんニ汝らの各々ろの前なる石垣の破
 壊たる處より奔出てハルモンに逃往んエホバこれを言ふ四汝ら
 ベタルに往て罪を犯えギルガルに往て益々おはく罪を犯せ朝こ
 とお汝らの犠牲を携へゆけ三日ごとお汝らの什一を携へゆけ五

酔い色たる者を感謝祭に獻げ願意よりする禮物を召てこれを告
 示せイスラエルの子孫よ汝らの斯するを好むなりと主エホバ言
 たまふまた我汝らの一切の邑あ於て汝らの齒を清からえめ汝
 らの一切の處あれいて汝らの食を乏しからえめたり然るも汝ら
 は我あ歸らずとエホバ言たまふまた我收穫までにい尙三月あ
 るに雨をとどめて汝らあ下さずの邑にい雨を降しよの邑あ
 雨をふらさざりき此田圃は雨を得彼田圃の雨を得ずして枯れた
 りハ二三の邑別の一の邑に颯めきゆきて水を飲ども飽こどあた
 りす然るも汝らに我あ歸らずとエホバ言たまふ我枯死穀と朽
 腐穂とをもて汝等を撃あやませりまた汝らの衆多の園と葡萄園
 と無花果樹と橄欖樹とに蝗これを食べり然るも汝らに我あ歸ら
 ずとエホバ言たまふ我あんぢらの中にエシプトに爲し如く疫
 病をおこし劍をもて汝らの少き人を殺し又汝らの馬を奪さり汝

らの營の臭氣を去て騰りて汝らの鼻を撲しめたり然るも汝らに
 我あ歸らずとエホバ言たまふ我あんぢらの中の邑を滅ぼす
 こどソドム、ゴモラを神の滅ぼしたまひし如くまたを汝らに火
 焰の中より取いだえたる燃柴とせどくあれり然るも汝らに我
 歸らずとエホバ言たまふイスラエルよ然るも汝らに我あ歸ら
 ずとエホバ言たまふ我あ汝らに對ひて宣る此言を聽け是
 我是を汝に行ふべけをイスラエルよ汝の神に會ふ準備をせよ
 彼に即ち山を作りなし風を造り出し人の思想の如何あるを
 の人に示しまた晨光をかへて黑暗とあし地の高處を踏む者あり
 の名を萬軍の神エホバといふ
 哀歎の歌なりニ處女イスラエルの休れて復起あがらず、彼の己
 の地あ扑倒さる、之を扶け起す者あし三主エホバかく言たまふ
 スラエルの家において前あ千人出たる邑は只百人のみのあり

前まへお百人出いたる邑まちの只ただ十人のみのみららん四よエホバのくイスラエ
ルらの家いお言いたまふ、汝おら我わを求もとめよさらば生いべし五ごベテルを求もとむ
るなかせ、ギルガルに往ゆなかせベエルシバに赴おもく勿なれ、ギルガルの
必かなず據たへら色いろゆきベテルら無なお歸きせん六む汝おらエホバを求もとめよ然さ
ら生いべし恐おそらくの埃ほこホバ火ひのごとくにヨセフの家いに落おくだりた
まひてろの火ひこれを焼やん、ベテルのためふこれを熄けす者もの一人ひとりもあ
らじ七なな汝おら公道おほ道を茵いん蔭んに變へじ正義たを地ちに擲なつる者ものよ八は昂あ宿しよ
ら参さん宿しを造つくり死あれ蔭かげを變へじて朝あとあし晝ひるを暗くらくして夜よるとあし海う
ら水みづを呼よびて地ちの面おもお溢ある者ものを求もとめよろの名なの埃ほホバとい
ふ九こ彼かれ滅ほ亡ろを忽たち然ま強つよ者ものに臨のぞましむ、滅ほ亡ろつひに城あ臨のぞむ十じ彼かれ
ら門かどにありて勸い戒まする者ものを惡にくみ正直たを言いふ者ものを忌い嫌きらふ十二じふ汝おら貧ま
ら者ものを踐ふつけ麥あの鹽しお物を之これより取とる、是これ故ゆえ汝おらの鑿き石いの家いを建た
しと雖いもろの中に住すことあらし美うしき葡萄ぶ萄たう園えんを作つくりしと雖いども

ろの酒さけを飲のむことあらし我わ知る汝おらの愆とがの多おほく汝おらの罪つみの大おほい
り汝おらの義たき者ものを虐あげ賄ま賂ひを取とり門かどにおいて貧まき者ものを推お枉まぐ十三
是これ故ゆえ今いまれ時ときの賢かしこき者もの黙もす是これ惡あし時ときあをあり十四じふ汝おら善ぜんを求もと
よ惡あくを求もとめざる然さらば汝おら生いべしまた汝おら言いふごとく萬まん軍ぐんの神かみ
エホバ汝おらと偕ともお在いまさん十五ご汝おら惡あくを惡にくみ善ぜんを愛あいし門かどおて公た義しを
立たよ萬まん軍ぐんの神かみエホバあるひのヨセフの遺のこる者ものを憐あはれみたまはん
是これ故ゆえ主したる萬まん軍ぐんの神かみエホバかく言いたまふ諸しよの街ち衢まにて啼なく
とあらん諸しよの大おほ路ぢおて人ひと哀あは哉い哀あは哉いと呼よん又また農のう夫ふを呼よきたりて哀あは
哭なしめ啼なき女を招まきて啼なしめん十七しちまた諸しよの葡ぶ萄たう園えんおも啼なくこと有あるべ
し其そのの我わ汝おらの中なかを通とほるべけ色いろありエホバ色いろを言いたまふ十八じふ
エホバの日ひを望のぞむ者ものの禍わざはひあるかな汝おら何なにとてエホバの日ひを望のぞむ
や是これ昏くらくして光ひかりあし十九じゅう人ひと獅子ししの前まへを逃のがれて熊くまお遇あひ又また家いに
いりてろの手てを壁かべに附つて蛇へびに咬かむるよに宛きも似にたり二十にじエホバの日ひ

の昏くして光あく暗にして輝あき非ずや我の汝らの節筵を
 惡みりつ藐視むまた汝らの集會を悦こむと汝ら我に燔祭また
 の素祭を献るとも我こそを受納じ汝らの肥たる犢の感謝祭の我
 これを顧みじ汝らの歌の聲を我前に絶て汝らの琴の音の我
 色を聴じ言公道を水のごとくに正義をつきざる河のごとくに流
 せしめよイスラエルの家よ汝らの四十年荒野お居し間犠牲と
 供物を我お献げたりしや云かへつて汝らの汝らの神とする星おして
 ひ汝らの偶像キウンを負へり是即ち汝らの神とする星おして
 汝らの自ら造り設けし者あり然らば我汝らをダマスコの外お移
 さん萬軍の神ととなふるエホバこそを言たまふ
 一 身を安くしてシオンに居る者思ひおぼらぬずしてサマ
 リヤの山に居る者諸の國おて勝れたる國の中ある聞え高くして
 イスラエルの家に就きまたがえる者禍あるかるニカル手に

渉りゆき彼處より大ハマラに至りまたペリシテ人のガテに下り
 て視よ其等此二國お愈るや彼らの土地の汝らの土地よりも大
 あるや汝等の災禍の日をもて尙遠と爲し強暴の座を近づけ
 自ら象牙の牀に臥し寢臺の上に身を伸し群の中より羔羊を取り
 園の中より犢牛を取て食ひ五琴の音においせて唱ひ噪ぎダビデ
 のごとくに樂器を製り出し六大聲をもて酒を飲み最も貴とさ膏
 を身に抹りヨセフの艱難を憂へざるあり七是故お今彼等の擄の
 れて俘囚人の眞先に立て往んかの身を伸したる者等の嘯の聲止
 べしハ萬軍の神エホバ言たまふ主エホバ已を指て誓へり我ヤコ
 ブ誇る所の物を忌嫌ひるの宮殿を惡む我この邑とろの中お充
 る者とを付すべし九一の家お十人遺りをるとも皆死んて而して
 ろの親戚するあいち之を焚く者ろの死骸を家より運びいださんと
 て之を取あげまたろの家のお奥お潛み居る者お向ひて他おなは汝

どのもに居る者あるやと言ふとき對へて一人も無しと言ん此時
 かの入また言べし黙せよエホバの名を口に擧ること有べからず
 どと視よエホバ命を下し大ある家を撃て墟址とあらしめ小き家
 を撃て微塵とあらしめたまふ馬わに能く岩の上を走らんや人
 わあ牛をもて岩を耕へすことを得んや然るに汝らの公道を毒に
 變じ正義の果を茵蔯に變じたり汝らの無物を喜こび我等の自
 分の力をもて角を得しあわらずやと言ふ苗是をもて萬軍の神エ
 ホバ言たまふイスラエルの家よ我一の國を起して汝らお敵せ玄
 めん是のハマテの人口よりアラバの川までも汝らをあやまさん
 再び生ずる時あたりて彼蝗を造りたまふ草の王は刈た
 る後に生じたるものあり二の蝗地の青物を食盡し後我言り
 主エホバよ願く之赦したまへヤコブの小し争か立ふとを得んと

三エホバの行へる事につきて悔をなし我これを爲しと言たま
 ふ主エホバの我お示したまへる所是のごとし即ち主エホバ火
 をもて罰せんとて火を呼たまひけを火大淵を焚きまた産業の
 地を焚んとす時お我言り主エホバよ願く止たまへヤコブの
 小し争か立ふとを得んとエホバの行へる事おつきて悔を
 し我ふれをあさしと主エホバ言たまふ七また我お示したまへる
 ところ是のごとし即ち準繩をもて築ける石垣の上にエホバ立ち
 るの手に準繩を執たまふ八而してエホバ我にむかひアモス汝何
 を見るやと言たまひけを準繩を見ると我答へしお主また言た
 まいなく我準繩を我民イスラエルの中お設く我再び彼らを見過し
 おせじ九イサクの崇邱の荒さをイスラエルの聖所お毀たれん我
 劍をもちてヤラベアムに家に起むかんの時にてベテルの祭司
 アマシヤ、イスラエルの王ヤラベアムに言遣りしけるのイスラエ

ルの家の真中にてアモス汝に叛けり彼の諸の言おの此地も堪る
 あたのざるなり即ちアモスかく言りヤラベアム劍よりて
 死んイスラエルと必ず擄へられてゆきてるは國を離れんと而
 してアマシヤ、アモスに言ける先見者よ汝往てユダの地に逃れ
 彼處にて預言して汝は食物を得よ然をベテルあての重ねて預
 言すべあらず是の玉の聖所王の宮あればあり而アマス對へてア
 マシヤに言ける我と預言者にあらずまた預言者の子にも非ず
 我の牧者あり桑は樹を作る者なりと然るにエホバ羊を従ふ所
 より我を取り往て我民イスラエルを預言せよとエホバわ色に宣
 へり去今エホバの言を聽け汝の言ふイスラエルあむかひて預言
 する勿きイサクの家あむひて言を出すあかれと是故あエホ
 バうく言たまふ汝の妻と邑の中にて妓婦となり汝の男子女子は
 劍に斃る汝の地は繩をもて分たれん而して汝の穢たる地あ死イ

主エホバの我に示したまへるとある是のごとし即ち熟
 したる果物一筐ありニエホバわれあむかひてアモス汝何を見る
 やと言たまひけきバ熟したる果物一筐を見るときこたへしおエホ
 バ我あ言たまひく我民イスラエルの終いたまひ我ふたふび彼ら
 を見過しおせし主エホバ言たまふ其日おの宮殿の歌の哀哭に
 變らん死屍あひたしくあり人これを過き處お投棄ん默せよ四
 汝ら喘ぎて貧き者お迫り且地の困難者を滅ぼす者よ之を聽け五
 汝らの言ふ月朔は何時過去んか我等穀物を賣んとす安息日は何
 時過去んか我ら麥倉を開かんとす我らエバを小さくしシケルを大
 くし偽の權衡をもて欺むく事をあし銀をもて賤しき者を買ひ
 鞋一足をもて貧き者を買ひかつ屑麥を賣いださんと七エホバヤ
 コプの榮光を指て誓ひて言たまふ我あらず彼等の一切の行爲

を何時までも忘るじハ之がために地震のざらんや地に住る者み
 む哭かざらんや地とある河のごとく噴あがらんエシブトの河のご
 とく湧あがり又沈まん主エホバ言たまふ其日には我日をして
 眞晝に没せまめ地をして白晝あ暗くあらまめ+汝らの節筵を悲
 傷お變らせ汝られ歌を盡く哀哭に變らせ一切の人お麻布を腰お
 纏いしめ一切の人に頂を剃しめ其日をえて獨子を喪へる哀傷の
 ごとくあらまめ其終をえて苦き日のごとくあらまめん主エホ
 バ言たまふ視よ日至らんとするの時我饑饉を此國におくらん是
 のパンお乏しきに非ず水に渴くに非ずエホバの言を聴ここの饑
 饉あり十三彼らの海より海とさまよひ歩き北より東と奔まはりて
 エホバの言を求めん然と之を得ざるべし十三ろの日おい美しき處
 女も少き男もともに渴のため絶いらん十四かのサマリアの罪を
 指て誓ひダンよ汝の神は活くと言ひまたベエルシバの路は活く

第九章

と言る者等ハ必ず仆れん復興ることあらじ
 震いせ之を打碎きて一切の人の首に落かすらまめよ其遣れる者
 を我劍をもて殺さん彼らの逃る者も逃おはするふとを得ず彼
 らの通る者もたすからじ=假令かれら陰府お掘くだるとも我
 手をもて之を其處より曳いださん假令かれら天お攀のぼるとも
 我これを其處より曳いさん三假令かきらカルメルカルメルの巖に匿る
 ごとく我これを捜して其處より曳いださん假令かれら海の底に
 匿れて我目を逃るごとく我蛇に命じて其處にて之を咬まめん四
 假令かれらろの敵お擄られもくとも我劍に命じて其處おて之を
 殺さまめん我かれらの上に我目を注ぎて災禍を降さん福祉を降
 さし主たる萬軍のエホバ地お擗きバ地鎔けるの中に住む者み
 む哀む即ち全地の河のごとくお噴あがりエシブトれ河のおとく

おまた沈むあり六 彼の樓閣を天に作り穹蒼の基を地の上お置る
 また海の水を呼て地の面おみれを樹ぐなり其名をエホバといふ
 七 エホバ言たまふイスラエルの子孫よ我の汝らを視ことエテオ
 ビア人を視ダごとくするにあらずや我のイスラエルをエシプト
 の國よりベリシテ人をカフトルよりスリア人をキルより導き來
 りしにあらずやハ視よ我主エホバの目を此罪を犯すところの
 國お注ぎ之を地の面より滅ぼし絶ん但し我のヤコブの家を盡く
 の滅ぼさじエホバこれを言ふ九 我すあち命を下し節にて物を
 篩ふダごとくイスラエルの家を萬國中にて篩ん一粒も地に
 落ざるべし十 我民の罪人即ち災禍わきらに及む我らに降らじ
 と言をる者等の皆劍によりて死ん十二 其日お我ダビデの倒をた
 る幕屋を興しその破壊を修繕ひろの傾圮たるを興し古代の日の
 ごとくお之を建あはすべし十二 而して彼らのエドムの遺餘者およ

ひ我名をもて稱へらる一切の民を獲ん此事を行あふエホバか
 く言なり十三 エホバ言ふ視よ日いたらんとすその時に耕者刈
 者に相繼ぎ葡萄を踐む者の播種者に相繼んまた山々にお酒滴り
 岡の皆鎔て流れん十四 我お民イスラエルの俘囚を返さん彼ら
 荒たる邑々を建あはして其處に住み葡萄園を作りてその酒を飲
 み園圃を作りてその果を食ん十五 我かれらをその地に植つけん
 彼らにお我おこれお興ふる地より重ねて拔とらるることあらず汝
 の神エホバこれと言ふ

亞麼士書終

阿巴底亞書

一 オバデアの預言、主エホバエドムにつきて斯いひたまふ、我らエ
 ホバより出たる音信を聞き一人の使者國々の民の中お遣はされ
 て云ふ起よ我等起てエドムを攻撃んと我汝を去て國々の中お
 いて小き者たらむ、汝は大に藐視らるゝあり、山崖の巖屋お
 居り高き處に住む者よ、汝が心の傲慢あんちを欺むけり、汝心の中
 お謂ふ誰の我を地に曳くだすことを得んと、汝たどひ驚のこと
 くに高く擧り星の間お巢を造るとも我ろみより汝を曳くださん
 エホバこそを言たまふ、五盜賊汝に來り強盜夜あんちに來り竊む
 ともろの心に満るときに止ざらんや、嗚呼あんちは滅ぼさきて絶
 ゆ、葡萄を摘む者汝にいたるも尙幾何を遺さらんや、嗚呼エサ
 ヲハ捜されろは隠しおける物の探りいださるセ、汝と盟約を結べ
 る人々いみあ汝を國境お逐やり、汝と和好をあせる人々いみあ汝

を欺きて汝に勝ち、汝の食物を食ふ者等、汝の下を羅を設く、彼の中おの穎悟あらず、エホバ言たまふ當日に、我智慧ある者をエドムより絶除き、穎悟をエサウの山より絶除せざらんや、九テマンよ、汝の勇士の驚き懼れん、而して人みある終に殺さきてエサウの山より絶除あるべし、汝の兄弟ヤコブに暴虐を加へたるに、因て耻辱あんちを蒙らん、汝の永遠お至るまで絶るべし、汝が遠く離れて立をりし日、即ち異邦人これお財寶を奪ひ、他國人これが門に進み入り、エルサレムのために籤を掣たる日、おの汝も彼らの一人のごとくありき、十二汝の汝の兄弟の日、すあ、ちろの災禍の日を觀るべからず、又ユダの子孫は滅亡の日を喜ぶべからず、ろの難れ、日に、汝口を大きく開べ、あらざるあり、十三我民の滅ぶる日、おの汝の門お入べからず、其滅ぶる日に、汝の患難を見べからず、又ろの滅ぶる日に、汝の財寶お手をうく可らず、十四汝路の辻

々お立てろの逃亡者を斬べ、あらず、其患難の日に、これが遺る者を付すべからず、十五エホバの日、萬國に臨むこと、邇し、汝の爲せること、く、汝も爲られ、汝の應報あんちの首に歸すべし、十六汝等のわが聖山にて、飲まおとく、萬國の民も恒に飲ん、即ちみる、飲かつ、啜りて、従前より有ざりし者のごとく、成ん、十七シオン山に、救はるゝ者等をりて、ろの山、聖所とあらん、またヤコブの家、ろの産業を獲ん、十八ヤコブの家、火とあり、ヨセフの家、火、燄とあり、エサウの家、葉とある、一人も無にいたるべし、エホバこれを言なり、十九南に、人、エサウの山を獲、平地に、人、ベリシテを獲ん、又、彼らに、エフライムの地、および、サマリアの地を獲べ、ニヤミンと、ギレアデを獲ん、二十か、汝は、色ゆき、し、イスラエルは、軍旅に、カナン人に、属する地を、ザレバテまで取ん、セバラデにある、エルサレムは、俘擄人の南の、邑々を獲ん、三、然

る時に救者シオンに山お上りてエサウの山を鞫るん而して國は
エホバに歸すべし

阿巴底亞書 終

米迦書

第一章
一 ユダの王ヨタムアハズおよびヒゼキヤの代おモレシテ
人ミカお臨めるエホバの言是するとちサマリヤとエルサレム
事につきて彼お示さる者ありニ萬民よ聽け地とろの中
よ耳を傾けよ主エホバ汝らお對ひて證を立たよとん即ち主
聖殿より之を立たよふべし三視よエホバの處より出てくだり
地の高處を踏たまとん四山に彼の下の融け谷に裂けたり火の前
ある蠟のごとく、坡お流るゝ水のごとし五是みなヤコブの愆の故
イスラエルの家の罪のゆゑあり、ヤコブの愆とい何かサマリヤ
あらずや、ユダの崇邱とい何か、エルサレムにあらずや六是故に我
サマリヤを野の石堆とるし葡萄を植る處と爲し又ろの石を谷に
投おとしろの基を露さん七ろの石像のみる碎かれ、ろの獲たる價
金のみる火おて焚れん、我ろの偶像をことく、く毀たん彼妓女の

價金よりこれを積たれば是れまた歸りて妓女の價金とあるべし、
 我これがために哭き咷ばん衣を脱ぎ裸體にて歩行ん山犬のこ
 どくに哭き駝鳥のこどくに啼ん九サマリアの傷の醫すべからざ
 る者にてすでにユダに至り我民の門エルサレムあまでおよべり
 ナガテに傳ふるあるれ泣さけふ勿れ、ベテレアフラにて我塵の中
 に輾びたりサビルに住る者よ汝ら裸にあり辱を蒙りて進みゆ
 け、ザアナンお住る者の敢て出ず、ベテエゼルの哀哭によりて汝ら
 の立處を得ずマロテに住る者の己の幸福につきて思ひなやむ、
 其の災禍エホバより出てエルサレムの門に臨めをあり十三ラキシ
 に住る者よ馬に車をつあげ、ラキシの女の罪の根本あり
 イスラエルの愆の汝の中お見ゆ十四あに故に汝モレセラガテに離
 別の饋物を與へよ、アクシブの家々のイスラエルの王等おあける
 こと人を欺く溪川のこどくあるべし十五マレシヤにすめる者よ我

また汝の地を獲べき者を汝に携へ往べしイスラエルの榮光アド
 ラムお往ん十六汝の悦ぶところの子等の故によりて汝の髪を剃
 おろせ、汝の首の剃し處を大きくして驚のこどくにせよ其の彼等擄
 へらきて汝を離るれをなり
 一ろの牀にありて不義を圖り惡事を工夫る者等に禍あ
 るべし彼らはろの手お力あるが故に天亮おあよべあれを行ふ
 二彼らの田圃を貪りてあれを奪ひ家を貪りて是を取りまた人を
 虐げてろの家を掠め人を虐げてろの産業をかすむ三是故にエホ
 バかく言たまふ視よ我此族おむかひて災禍を降さんと謀る、汝ら
 はろの頸を是より脱すること能はじまた首をあげて歩くも能
 んざるべし其時の災禍の時なればあり四ろの日に人汝らにつ
 きて詩を作り悲哀の歌をもて悲哀て言ん事既にいたれり我等の
 盡く滅ぼさる、彼わが民の産業を人に與ふ、如何あるを我よりこそ

を離すや我等の田圃を違逆者お分ち與ふ五然を汝らエホバの會
 衆の中には籤によりて繩をうつ者一人も有七六預言する勿を彼
 らの預言す、彼らの是等の者等にむひて預言せし、恥辱彼らを離
 れざるべし七汝ヤコブの家と稱へらるる者よエホバの氣短から
 んやエホバの行為是のごとくあらんや我言と品行正直者の益と
 らざらんや八然るに我民の近頃起りて敵とあせり汝らの夫の
 戦争を避て心配なく過るところの者等に就てるの衣服の外衣を
 奪ひ九我民の婦女をろの悦みふとふるの家より逐いだしるの子
 等より我の妝飾を永く奪ふ十起て去是の汝らの安息の地にあら
 す是の己に汚れたれを必ず汝らを滅ぼさん其滅亡の劇りるべし
 十一人もし風に歩と謊言を宣べ我葡萄酒と濃酒の事あつきて汝に
 預言せんと言ふとあらばろの人のこの民の預言者とならん十三ヤ
 コブよ我かならず汝をことく集へ必ずイスラエルの遺餘者

を聚めん而して我之を同一お置てポツラの羊のごとく成えめん
 彼らの人數衆きおよりて牧場の中ある群のごとくにろの聲をた
 てん十三打破者かれらに先だちて登り彼ら遂に門を打敗り之を通
 りて出ゆかん彼らの玉ろの前にたちて進みエホバの首に立た
 まふべし

第三章

一我言ふヤコブの首領よイスラエルの家の侯伯よ汝ら聽

け公義は汝らの知べきあとに非ずやニ汝らの善を惡み惡を好み
 民の身より皮を剥ぎ骨より肉を剔り三我民の肉を食ひろの皮を
 剥ぎろの骨を碎きこれを切きざみて鍋に入る物のごとくし鼎の
 中あいるる肉のごとくす四然を彼時に彼らエホバお呼のるとも
 エホバかれらお應へたおのし却てるの時にの面を彼らに隠した
 まいん彼らの行惡けきあり五我民を惑ひす預言者の齒にて嚙
 べき物を受る時の平安あらんと呼ひきとも何をもちの口お與へ

ざる者にむかひての戰鬥の準備をあす、エホバ彼らにつきて斯い
 ひたまふ。然らば汝らの夜に遭べし復異象を得じ黑暗に遭べし復
 卜兆を得じ日りの預言者の上をいゝれて没りるの上の晝も暗
 かるべし。七見者の愧を抱き卜者の面を赧らめ皆共にの唇を掩
 りて能力身お満ち公義および勇氣衷お満きをヤコブあるの徳を
 示しイスラエルにの罪を示すことを得。九ヤコブの家の首領等
 およびイスラエルの家の牧伯等公義を惡み一切の正直事を曲る
 者よ汝ら之を聴け。十彼らは血をもてシオンを建て不義をもてエ
 ルサレムを建つ。十一の首領等の賄賂をとりて審判をなし。十二の祭
 司等の値錢を取て教誨をあす。又の預言者等の銀子を取て占卜
 を爲しエホバお倚頼みて云ふ。エホバわれらと偕に在すにあらす
 や。然を災禍わきらお降らじ。十三是によりてシオンは汝のゆゑに

田圃となりて耕へされエルサレムの石堆となり宮の山の樹の生
 まげる高處とあらん。一末れ日にいたりてエホバの家は山、諸の山の嶺に立ち諸
 の嶺にふえて高く聳へ萬民河のおどく之に流を歸せん。ニ即ち衆
 多の民來りて言ん去來我等エホバの山お登りヤコブは神の家に
 ありんエホバの道を我らお教へて我らあるの路を歩ま。三
 まとん律法のシオンより出でエホバの言のエルサレムより出べ
 けをむあり。三彼衆多の民は間を鞫き強き國を規戒め遠き處おま
 でも然。五たまふべし。彼らの劍を鋤に打かへるの鎗を録に打
 かへん。國と國との劍を擧て相攻す。また重て戰爭を習ひ。七四皆
 の葡萄の樹は下に坐し。ろの無花果樹の下お居ん。之を懼を忘むる
 者あるべし。萬軍のエホバの口おれを言ふ。五一切の民のみな各
 々の神の名によりて歩む。然ども我らに及れらの神エホバの名

によりて永遠お歩まん 六 エホバ言たまふ其日に我かの足蹇たる者を集への散されし者および我が苦志めし者を聚め七の足蹇たる者をもて遺餘民とあし遠く逐やらせたりし者をもて強き民とあさん而してエホバシオンの山おいて今より永遠おこ色ガ王とならん 八 羊樓シオンの女の山よ最初に權汝お歸らん即ちエルサレムの女の國祚あんに歸るべし九汝あにとて喚叫ぶや汝の中に王あさや汝れ議者絶果しや汝の産婦のおどくに痛苦を懐くあり 十 シオンの女よ産婦のおどく助勞て産め汝の今邑を出て野に宿りバビロンに往ざるを得ず彼處おて汝救われん 十一 エホバ汝をかしてにて汝の敵れ手より贖ひ取りたまふべし 十二 今許多の國民あつまりて汝おしよせて言ふ願く之シオンの汚させんことを我ら目にシオンを觀てあぐさまんと 十三 然あがら彼らのエホバの思念を知らずまたろの御謀議を曉らずエホバ麥束を打場お

あつむるごとくに彼らを聚めたまへり 十三 シオンの女よ起てこあせ我あんちの角を鐵にし汝れ蹄を銅にせん汝許多の國民を打碎くべし汝かれらの掠取物をエホバに獻げ彼らの財産を全地の主に奉納べし

第五章 一軍隊の女よ今あんなち集りて隊をつくき敵われらを攻圍

杖をもてイスラエルの士師の頬を撃つ 二 ベテレヘム、エフラマ汝のユダの郡中にて小き者あり然れどもイスラエルの君とある者汝の中より我ためお出べしろの出る事古昔より永遠の日よりあり 三 是故お産婦れ産おとすまで彼等を付しおきたまはん然る後ろの遺せる兄弟イスラエルの子孫とよみに歸るべし 四 彼のエホバの力お由りろの神エホバの名の威光およりて立てろの群を救ひ之を去て安然に居おめん今彼の大ある者となりて地の極おまでおよむん 五 彼の平和ありアツスリア人おまらの國お入

り我らの宮殿を踏あらさんとする時我等七人の牧者八人の人
 君を立ててこそお當らん六彼ら剣をもてアツスリアの地を得るば
 しニムロデの地の邑々をほろぼさんアツスリアの人我らの地に
 攻いり我らの境を踏あらず時に彼らの手より我らを救はん七
 ヤコブれ遺餘者の衆多の民の中に在ると人に頼ず世の人を候す
 してエホバより降る露の如く青草の上あふりしく雨の如くなら
 んハヤコブの遺餘者の國々あをり衆多の民の中にをる様ハ林の
 獸の中に獅子の居ることく羊の群れ中に猛き獅子の居ることく
 あらんろの過るときに踏まかつ裂ことをあす救ふ者あし望ら
 くん汝の手汝が諸の敵の上ああげらき汝がもろくの仇ことこ
 どく絶れんことを+エホバ言たまふ其日に我なんちの馬を汝
 の中より絶ち汝れ車を毀ち十二汝の國の邑々を絶し汝の一切の城
 をことくく圯さん十二我また汝の手より魔術を絶ん汝の中おト

筮師無おいたるべし十三我あんちの彫像および柱像を汝の中より
 絶ん汝の手にて作る者を汝重て拜むこと無るべし十四我また汝
 のアセラ像を汝の中より拔たふし汝の邑々を滅ぼさん十五而して
 我忿怒と憤恨をもてるの聽従はざる國民お仇を報いん

第十六章

一請ふ汝らエホバの宣まふところを聽け汝起あがりて山
 の前に辯争へ、崗に汝の聲を聽まめよ二山々よ地の易ることあき
 基よ汝らエホバの辯争を聽けエホバの民と辯争を爲しイストラ
 エルと論ぜん三我民よ我何を汝にゐしとや何に於いて汝を疲勞
 たるや我おむりひて證せよ四我のエンプトの國より汝を導きの
 ぼり奴隸の家より汝を贖ひいだしモーセアロンおよびミリアム
 を遣ひして汝お先だゝえめたり五我民よ請ふモアブの王バラク
 グ謀りし事およびベオールの子パラムびてを應へし事を念ひし
 ツテムよりギルガルおいたるまでの事等を念へ然らむ汝エホバ

の正義を知ん。我エホバに前に何をもちゆきて高き神を拜せん、
 燔祭の物および當歲に積をもてるは御前にいたるべきか。七エホ
 バ數千の牡羊、萬流に油を悦びたまひんか。我愆のためおわが長子
 を獻かんか。我靈魂の罪のためお我身の産を獻かんか。八人よ彼さ
 きお善事の何あるを汝お告たりエホバに汝お要めたまふ事、唯
 正義を行ひ憐憫を愛し謙遜りて汝の神ととも歩む事あらずや。
 九エホバの聲、おむのひて呼べる、智慧ある者はあんなの名を仰
 ぶん。汝ち笞杖および之をおくらんと定めし者お聴け。十惡人れ家
 に猶惡財ありや。詛ふべき縮小たる升ありや。十一我もし正からざる
 權衡を用ひ袋に偽の碼子をいれおの争で潔からんや。十二の富
 る人の強暴にて充ち其居民の謊言を言ひろの舌の口の中おて欺
 むくみとを爲す。十三是をもて我も汝を撃て重傷を負せ。汝の罪のた
 めに汝を滅ぼす。十四汝の食ふとも飽す。腹のつねに空あらん、汝の移

すともつひお拯ふもとを得じ。汝お拯ひし者の我これ剣お付す
 べし。十五汝の種播とも刈ることあらず。橄欖を踐ともろの油を身お
 抹ることあらず。葡萄を踐ともろの酒を飲ことあらず。十六汝らハオ
 ムリの法度を守りアハブの家一切の行爲を行ひて彼等の謀計
 に遵ふ。是れ我を去て汝を荒さ。且ろの居民を胡慮とあさ。去め
 んが爲あり。汝らハわが民に恥辱を任べし。
 第七章 我の禍あるか。我の景況ハ夏の菓物を採る時のごとく
 遺せる葡萄を斂むる時お似たり。食ふべき葡萄あること無く。我が
 心に嗜む初結の無花菓あること無し。ニ善人地に絶ゆ、人の中に直
 き者あし、皆血を流さんと伏て伺ひ。各々網をもてるの兄弟を獵る
 三兩手の惡を善あす。お急ごし。牧伯の要求め。裁判人の賄賂を取り
 力ある人の心の惡き望を言あらんし。斯共にろの惡をあさる
 ひ合す。四彼らの最も善き者も荆棘のごとく。最も直き者も刺ある

の正義を知ん。我エホバに前に何をもちゆきて高き神を拜せん、
 燔祭の物および當歲に積をもてるは御前にいたるべきか。七エホ
 バ數千の牡羊、萬流に油を悦びたまひんか。我愆のためおわが長子
 を獻かんか。我靈魂の罪のためお我身の産を獻かんか。八人よ彼さ
 きお善事の何あるを汝お告たりエホバに汝お要めたまふ事、唯
 正義を行ひ憐憫を愛し謙遜りて汝の神ととも歩む事あらずや。
 九エホバの聲、おむのひて呼べる、智慧ある者はあんなの名を仰
 ぶん。汝ち笞杖および之をおくらんと定めし者お聴け。十惡人れ家
 に猶惡財ありや。詛ふべき縮小たる升ありや。十一我もし正からざる
 權衡を用ひ袋に偽の碼子をいれおの争で潔からんや。十二の富
 る人の強暴にて充ち其居民の謊言を言ひろの舌の口の中おて欺
 むくみとを爲す。十三是をもて我も汝を撃て重傷を負せ。汝の罪のた
 めに汝を滅ぼす。十四汝の食ふとも飽す。腹のつねに空あらん、汝の移

樹の垣より惡し汝の觀望人の日すあち汝の刑罰の日いたる、彼らの中に今混亂あらん五汝ら伴侶を信する勿き朋友を恃むなるれ、汝の懷に寢る者にむりひても汝の口の戸を守れ六男子の父を藐視め女子の母お背き媳の姑お背あんの敵の家の者あるべし七我のエホバを仰ぎ望み我を救ふ神を望み俟つ、我神われに聽たまふべし八わぶ敵人よ我につきて喜ぶあかれ、我仆るれば興あぶる、幽暗お居バエホバ我の光とありたまふ九エホバわが訴訟を理し我ためお審判をおこるひたまふまで我の忍びてろの忿怒をかうむらん其の我これお罪を得たれをなりエホバの正義を見ん十且が光明に携へいだしたまそん而して我エホバの正義を見ん十一且が敵これを見ん、汝の神エホバの何處にをるやと我お言る者恥辱をかうむらん我かれを目お見るべし彼の街衢の泥のどくくに踏つけらるべし十二汝の垣を築く日いたらん其日に法の度遠く徙るべ

し十三ろの日にのアツスリアよりエジプトの邑々より人々汝お來りエジプトより河まで海より海まで山より山までの人々汝に來り就ん十三ろの日地のろの居民の故によりて荒とつべし是ろの行為の果報あり昔汝の杖をもて汝の民即ち獨離れてカルメルの中的林にをる汝の産業の羊を牧養ひ之をして古昔の日のどくバシヤンあよびギレアドおいて草を食は志めたまへ十五汝がエジプトの國より出來し日のどく我ふしぎある事等を汝にえめさん其國々の民見てろの一切の能力を恥ぢろの手を口にあてん、ろの耳の聾とあるべし七彼らの蛇のどくお塵を餌め地に匍ふ者のごどくおろの城より振て出で戰慄て我らの神エホバに詣り汝のため懼おそん十八何の神の汝に如ん汝の罪を赦しろの産業の遺餘者の愆を見過したまふなり、神の憐憫を悦ぶお故にろの震怒を永く保ちたまえ十九ふたたび顧みて我らを憐れみ我らの愆を踏

つけ我らの諸の罪を海の底に投志づめたまへん
 汝古昔の日と
 色らの先祖に誓ひたりしるの眞實をヤコブお賜ひ憐憫をアブラ
 ハムに賜えん

米迦書終

拿翁書

第一章

ニ子へお關る重き預言、エルコレ人ナホムの異象の書ニ
 エホバは妬みかつ仇を報ゆる神、エホバの仇を報ゆる者また忿怒
 の主、エホバの己お逆らふ者に仇を報い己に敵する者にむかひて
 憤恨を含む者あり、エホバの怒るよとの遅く能力の大ある者ま
 た罰すべき者を必す赦すよとを爲さる者、エホバの道の旋風に
 在り大風お在り雲の足の塵あり、彼海を指斥て之を乾かし
 河々を玄てよとく涸志む、バシヤンおよびカルメルの艸木の
 枯れレバノンの花の凋む、彼の前に山々ゆるぎ嶺々溶く、彼の
 前に地墳上り世界およびろの中お住む者皆ふさあげらる、誰
 かの憤恨お當ることを得ん誰かの燃る忿怒に堪ることを得
 ん其震怒のろくこと火のむとし農も之おためお裂く、エホバ
 の善ある者にして患難の時の要害あり、彼己に倚頼む者を善知

たよふ、八 彼漲ぎる洪水をもてるの處を全く滅ぼし已敵する者
 を幽暗處に逐やりたまひん九 汝らエホバに對ひて何を謀るや彼
 全く滅ぼしたよふべし、患難かさねて起らじ十 彼等ひすびからま
 れる荆棘のごとくあるとも酒に浸りをるとも乾ける藁のごとく
 に焚つくさるべし十一 エホバに對ひて惡事を謀る者一人汝の中よ
 り出て邪曲ある事を勸む十二 エホバの言たまふ彼等全くしてろ
 の數夥多しかるとも必ず芟たふされて皆絶ん、我前あひんぢを
 苦めたれども重て汝を苦めじ十三 いま我かきダ汝に負せし鞭を碎
 き汝の縛を切とあすべし十四 エホバの事につきて命令を下す汝
 の名を負ふ者再び播るゝこと有じ汝の神々の室より我彫像およ
 び鑄像を除き絶べし我汝の墓を備へん、汝輕ければあり十五 嘉音信
 を傳ふる者の脚、山の上に見ゆ、彼平安を宣ふ、ユダよ汝の節筵を行
 ひ汝の誓願を果せ、邪曲ある者重て汝の中を通らざるべし彼の全

く絶る



撃破者攻のぼりて汝の前あ至る、汝城を守り路を窺ひ腰
 を強くし汝れ力を大に強くせよニエホバのヤコブの榮を舊に復
 してイスラエルの榮のごとくしたよふ、其の掠奪者て色を掠めろ
 紅に身を甲ふ、其行伍を立る時に戦車の鐵灼爍て火のごとし鎗
 また閃めさふるふ四 戦車街衢に狂ひ奔り大路に推あふ、其形状火
 炬のごとく其疾く馳ること電光れ如し五 彼られ將士を憶ひいだ
 す、彼らんの途にて躓き仆れろれ石垣に奔ゆき大楯を備ふ六 河
 々の門啓け宮消うせん七 彼の事定まれり彼の裸にせられて擄の
 色ゆさろれ宮女胸を打て鴿のごとくに啼くべし八 二子べはろの
 建し日より以來水の満る池お似たりしダろの民今の逃奔る、止れ
 止れと呼せも後を顧る者あし九 白銀を奪へよ黄金を奪へよろの

寶物限たからものかぎりあもろくく諸の貴たかとき器用夥多うちはものむだたし十滅亡ほろびたり空虚ひんじくなれり荒果あはたり
 り心こころ之消きえ膝ひざの慄ふるひ腰こしに凡すべて劇はげしき痛いたみあり面かほのな色いろを失うしなふ
 雌め獅子ししの穴あな之何處いづこ不なや少わかき獅子ししれ物ものを食くらふ處ところの何處いづこ不なや雄を獅子しし
 雄を獅子ししと小獅子こししのためために物ものを嚙かみころしころの掠かすめ獲えたる物ものをもて
 穴あなに充みしろの裂さ殺ころしころ物ものをもて住所すまかに滿みすみ三萬軍さんまんにのエホバ言いた
 まふ視みよ我われあんちあんちに臨のぞむ我われあんちあんちの戰車いくばくを焚やき煙けとなすべし汝
 の少わかき獅子ししの使つか者の聲こゑかさねて聞きゆること無ならん
 絶たべし汝の使つか者の聲こゑかさねて聞きゆること無ならん
 充みち掠かめ取とること息やすす鞭むちの音おとあり輪わの轟とどろく音おとあり馬うまの躍たり跳は
 ね車くるまの輾こり行く三騎兵さんきへい馳はのぼり劍つるぎさらめき鎗やりひらめく殺ころさる
 者夥多おほたしく去さて死屍山しかばねを爲なし死骸限しかがいあし皆死屍みなしかばねに躓つまずきて倒たる
 是こゝの魔術まじゆつの主ぬしある美うつくしき妓女おんな多く淫行いんかうを行おこなひろの淫行いんかうをも
 て諸國しよこくを奪とひろの魔術まじゆつをもて諸族しよぞくを惑まどしたるに因よてあり五萬
 軍ぐんのエホバ言いたまふ視みよ我われあんちあんちに臨のぞむ我われあんちあんちの裳ほ裾すそを掲かげ
 て面おもての上うへにまで及およぼし汝の陰所かげしよを諸民しよたみんに見まし汝の羞はる所ところを諸國
 に見ますべし我われまた穢けはしき物ものを汝の上うへに投なり投なり汝を辱はづかめ
 汝をして賽物かものとあらしめん凡すべて汝を見る者ものとみみ汝を避さて奔はし
 り去さりニ子こべの亡ぼろびたりと言いふ誰か汝のためため哀あはれかんや何處いづこよ
 りして我われあんちあんちを弔なぐさむ者ものを尋たね得えんや汝なんぢの周圍まわりに環めぐらし海うみも
 らんやノアモンノアモンの河々かはの間まに立たち水みづをろの周圍まわりに環めぐらし海うみも
 て壕ぼりとあし海うみをもて垣かきとあせりかつろの勢ちから力ちからたる者もののエテオ
 ビア人ビア人あよびエシブト人エシブト人あどにして限かぎあらずフテ人エシブト人ルビ人エシブト人等汝
 を助たすけたりかき然しかるに是こゝも俘囚とりことありて據とりてゆきろの子こ女め
 の一切すべの衢ちまたの隅々すみずみにて投なげられかて碎くだけ又またろの尊貴者たうきせきの籤くじにて分わか

是こゝの魔術まじゆつの主ぬしある美うつくしき妓女おんな多く淫行いんかうを行おこなひろの淫行いんかうをも
 て諸國しよこくを奪とひろの魔術まじゆつをもて諸族しよぞくを惑まどしたるに因よてあり五萬
 軍ぐんのエホバ言いたまふ視みよ我われあんちあんちに臨のぞむ我われあんちあんちの裳ほ裾すそを掲かげ
 て面おもての上うへにまで及およぼし汝の陰所かげしよを諸民しよたみんに見まし汝の羞はる所ところを諸國
 に見ますべし我われまた穢けはしき物ものを汝の上うへに投なり投なり汝を辱はづかめ
 汝をして賽物かものとあらしめん凡すべて汝を見る者ものとみみ汝を避さて奔はし
 り去さりニ子こべの亡ぼろびたりと言いふ誰か汝のためため哀あはれかんや何處いづこよ
 りして我われあんちあんちを弔なぐさむ者ものを尋たね得えんや汝なんぢの周圍まわりに環めぐらし海うみも
 らんやノアモンノアモンの河々かはの間まに立たち水みづをろの周圍まわりに環めぐらし海うみも
 て壕ぼりとあし海うみをもて垣かきとあせりかつろの勢ちから力ちからたる者もののエテオ
 ビア人ビア人あよびエシブト人エシブト人あどにして限かぎあらずフテ人エシブト人ルビ人エシブト人等汝
 を助たすけたりかき然しかるに是こゝも俘囚とりことありて據とりてゆきろの子こ女め
 の一切すべの衢ちまたの隅々すみずみにて投なげられかて碎くだけ又またろの尊貴者たうきせきの籤くじにて分わか

たれ其大なる者のみみる鍵に撃がれたり十二汝もまた醉せられて終
 に隠匿ん汝もまた敵を避て逃るる處を尋ね求めん十三汝の城々の
 みる初お結びし果のあれる無花果樹のごとし之を撼おせざるの
 果落て食いんとする者の口に在る十三汝の中にある民の婦人のご
 とし汝の地の門のみみる汝の敵の前に廣く開きてあり火あんちの
 關を焚ん十四汝水を汲て圍まるる時用の備へ汝の城々を堅くし
 泥の中お入て礎て石灰を作りかつ瓦燒密を修理へよ十五其處にて
 火汝を焚き劍あんちを斬ん其なんちを滅ぼすこと吸蝗のごとく
 あるべし汝吸蝗のごとく數多からば多かき汝群蝗のごとく數多
 からば多うれ十六汝の重臣の群蝗のごとく汝の軍長の群蝗のご
 掠めて飛さるる十七汝の重臣の群蝗のごとく汝の軍長の群蝗のご
 とし寒き日に垣に巢窟を構へ日出きたるを飛て去るるの在る
 處を知る者あし十八アツスリアの王よ汝の牧者の睡り汝の貴族の

臥す又なんちの民の山々に散さる、之を聚むる者あし十九汝の傷の
 愈ること無し汝の創の重し汝の事を聞およぶ者のみみる汝の故お
 よりて手を拍ん誰う汝の悪行を恒に身に受ざる者やある

哈巴谷書

第一章

呼よひるにに汝の我に聽たまひさるよと何時までや我あんぢにむ
 加ひて強暴を訴たふれとも汝の助けたまひさるあり三汝何とて
 我の害悪を見せたまふや何とて艱難を瞻望居たまふや奪掠あよ
 弛み公義正しく行いれず惡き者義き者を圍むが故に公義曲りて
 行ないる五汝ら國々の民の中を望み觀駭ろけ駭ろけ汝らの日に
 我一の事を爲ん之を告る者あるとも汝ら信ぜさらん六視よ我カ
 ルデア人を興さんとす是すあとち猛くまた荒き國人にして地を
 縱横に行めぐり己の有あらさる住處を奪ふ者あり七是は懼るべ
 く又驚くべし其是非威光は己より出づハろの馬は豹よりも迅く
 夜求食する豺狼よりも疾し其騎兵と跑まとる即ちろの騎兵は遠

き處より來る、其飛みとは物を食ひんと急ぐ驚のごとし、
 是は全強暴のため來り其面を前みひけて頻に進む、
 ろの俘虜を寄集ひるゐとは砂のごとし、
 是は王等を侮り君等を笑ひ諸の城々を
 笑ひ土を積あげてゐれを取ん、
 斯て風のごとくお行めぐり進み
 わたりて罪を獲ん、
 是は己の力を神とす、
 エホバわが神わが聖者
 よ汝の永遠より在すお非ずや、
 我らは死じ、
 エホバよ汝は是を審判
 のために設けたまへり、
 磐よ汝の是を懲戒のためお立たまへり、
 汝の目清くして肯て惡を觀たまへざる者、
 肯て不義を視たまへざる者あるに何ゆゑ邪曲の者を觀すて置たまふや、
 惡き者の己にまさりて義き者を吞噬ふに何ゆゑ汝黙し居たまふや、
 齒汝は人を去て海の魚のごとくあらまめ君あらぬ昆蟲のごとくならまめたまふ彼鉤をもて、
 之を盡く釣あげ網をもて之を寄せ集め引網をもて之を捕ふるあり、
 是は故お彼らの網に穢

牲を獻げろの引網に香を焚く、
 其の之がためにろの分肥まさりろの食饒にありたれをあり、
 然と彼らの網を傾けつゝあはたえず國々の人を惜みなく殺す、
 いとをすならんか、
 我わが觀望所お立ち成樓お身を置ん、
 而して我候ひ望みて其われに何と宣まふか、
 を見わが訴言に我みづから何と答ふべきか、
 を見ん、
 エホバわきに答へて言たまへ、
 此獸旨を書え、
 して之を板の上お明白に鏤つけ、
 奔りあがらも之を讀べ、
 此獸示のあは定まざる時を俟て、
 ろの終を急ぐあり、
 偽あらず、
 若し遅くあらば待べし、
 必ず臨むべし、
 濡滞りのせじ、
 四視よ彼の心の高ぶりの中にありて直あらす、
 然と義き者のろの信仰およりて活べし、
 五かの酒に耽る者の邪曲ある者あり、
 驕傲者おして安んぜず、
 彼のろの情慾を陰府のごとくに潤くす、
 また彼の死のごとし、
 又足こをを知らず、
 萬國を集へて己に歸せ、
 まめ萬民を聚めて己に就え

其等の民みる諺語をもて彼を評し嘲弄の詩歌をもて彼を諷
 せざらんや即ち言ん己に屬せざる物を積累ぬる者の禍なるか
 斯て何の時にもまでおよむんや嗟かの質物の重荷を身お負ふ者よ
 汝を噬む者おはかお興らざらんや汝を惱ます者醒出ざらんや
 汝の之に掠めらるべし汝衆多の國民を掠めしに因てるの諸の
 民の遣れる者なんぢを掠めん、是人の血を流しよお因るまた強暴
 を地上に行ひて邑とろの内に住る一切の者とお及ぼせしお因
 るなり災禍の手を免ぎんがために高き處に巢を構へんとして
 己の家不義の利を取る者の禍なるあり汝の事を圖りて己の
 家に恥辱を來らせ衆多の民を滅して自ら罪を取りし石垣の石叫
 び建物の梁これお應へん血をもて邑を建て惡をもて城を築く
 者の禍あるかな十三諸の民の火のためには勞し諸の國人の虚空事の
 ためお疲る、是の萬軍のエホバより出る者あらずや十四エホバの榮

光を認むるの知識地上に充て宛然海を水の掩ふが如くあらん
 人お酒を飲せ己の忿怒を酌和へて之を酔せ而して之が陰所を見
 んとすする者の禍あるかな十六汝の榮譽に飽すして羞辱お飽り汝も
 また飲て汝の不割禮を露とせ、エホバの右の手の杯汝に巡り來る
 べし汝の汚るべき物を吐て榮耀を掩えん十七汝おレバノンに爲たる
 強暴と獸を懼れえめしろの殲滅どの汝の上には報いきたるべし、是
 人の血を流えしに因りまた強暴を地上に行ひて邑とろの内お住
 る一切の者とお及ぼえしに因るあり十八雕像の作者の色を刻
 みたるとして何の益あらんや又鑄像および偽師の語のぬ偶像な
 ばろの像の作者の色を作りて頼むとも何の益あらんや十九木にむ
 かひて興ませと言ひ、語のぬ石にむりひて起たまへと言ふ者の禍
 あるか、是はお教誨を爲んや視よ是の金銀を着せたる者にてろ
 の中おの全く氣息あし二十然りとはいへどもエホバの聖殿に在

ますろかし、至地ろの御前お黙すべし
第二章 シギヨノテお合せて歌へる預言者ハバククの祈禱、ニエ
 ホバよ我あんなちの宣ふ所を聞て懼るエホバよこの諸の年の中間
 に汝の運動を活潑かせたまへ、此諸の年の間に之を顯現したまへ、
 怒る時にも憐憫を忘きたまひざきニ神テマンより來り聖者バラ
 ン山より臨みたまふ、セラ其榮光諸天を蔽ひ、其讚美世界に徧ねし
 四ろの朝耀の日のごとく光線ろの手より出づ、彼處ろの權能の
 隠るる所あり五疫病ろの前に先だち行き熱病ろの足下より出づ
 六彼立て地を震とせ、觀まひして萬國を戰慄おめたまふ、永久の山
 の崩れ、常磐の岡の陷いる、彼の行ひたまふ道の永久ありセ我觀る
 にクシヤンの天幕の艱難お雇りニデアンの地の幃幕の震ふハエ
 ホバよ汝の馬を驅り、汝の拯救の車に乗たまふ、是河にむかひて怒
 りたまふあるの、河にむかひて汝の忿怒を發したまふあるか、海に

ひろひて汝の憤恨を洩したまふあるか、汝の弓の全く囊を出で
 杖の言をもて言のためらる、セラ、汝の地を裂て河とあしたまふ
 山々汝を見て震ひ洪水溢色わたり淵聲を出してろの手を高く舉
 ぐ十二汝の奔る矢の光のため汝の鎗の電光のごとき閃爍のためお
 日月ろの住處に立とままる十二汝の憤得りて地を行めぐり、怒りて
 國民を踏つけたまふ十三汝の民を救んとて出きたり汝の膏沃
 げる者を救とんとて臨みたまふ汝の惡き者の家の頭を碎きろの
 石礎を露にして頸およぼしたまへり十四汝の彼の鎗をもてるろの
 將帥の首を刺と得したまふ、彼ら我を散さんとして大風のごとく
 に進みきたる、彼ら貧き者を密に吞ほろぼす事をもてるの樂と
 す十五汝の汝の馬をもて海を乗と得り大水の逆巻とてろの樂と
 おふ十六我聞て腸を斷つ、我唇ろの聲あよりて震ふ、腐朽わが骨お入
 り我下體わろく、其の我患難の日の來るを待をあり、其時お即

ところ此民が攻寄る者ありて之に押逼らん
 樹の花咲す、葡萄の樹に果あらず、橄欖の樹の産の空くあり田圃
 の食糧を出さず園に羊絶え小屋に牛あかるべし然あぐら
 我のエホバによりて樂みわが拯救の神によりて喜べん主エ
 ホバの我が力おして我足を鹿のどくあらしめ我をえてわが高き
 處を歩まゝめたまふ○伶長これを我琴にあはすべし

此の民は我に攻寄る者ありて之に押逼らん
 樹の花は咲かず葡萄の樹に果あらず
 橄欖の樹の産は空くあり田圃の食糧は
 出さず園に羊絶え小屋に牛あかるべし
 然あぐら我のエホバによりて樂みわが
 拯救の神によりて喜べん主エホバの
 我が力おして我足を鹿のどくあらしめ
 我をえてわが高き處を歩まゝめたまふ
 ○伶長これを我琴にあはすべし

哈巴谷書 終

DEC 20 1947

95-91144

立教大学図書館



95-91144